Osaka University Knowledge Archive

Title	自己概念の「非一貫性」の適応的意味に関する実証的研究
Author(s)	金川, 智恵
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42786
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【15】

氏　　名	金川智恵（かながわ ちえ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　16372　号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**自己概念の「非一貫性」の適応的意味に関する実証的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　外山みどり （副査） 教　授　大坊　郁夫　　助教授　榎本　博明

論文内容の要旨

本研究の目的は、自己概念の「非一貫性」と適応の関係を、特に「非一貫性」が適応において果たす効果性や意味を中心に検討し、そのことを通じて〈自己〉が行動の組織化や適応的方向づけ・精神的健康などといった適応といかに関連しているかを吟味することである。

自己概念の「一貫性・非一貫性」については、一貫しているのか・いないのか、あるいは一貫性が適応に効果的なのか、否かを巡って、対立する諸見解・諸結果がこれまで示されてきた。本研究では自己概念の多様な「非一貫性」の様態を、自己概念が組織化される際のプロセスとひとたび組織化された自己概念の構造の両観点から整理し、「非一貫性」の適応における効果性を明らかにすると同時に、従来の議論の総合的考察を試みる。

(1)まず、組織化にまつわる「非一貫性」については、working self-concept の観点から、自己概念は「状況間では非一貫性を示すが、時間的には比較的一貫している」、またこのような自己概念の状況間「非一貫性」と時間的「一貫性」は、ともに適応的意味を持つという仮説を検討した。状況間「非一貫性」については、対人状況という刺激過重事態において、自己概念が選択的に喚起されるメカニズムとの関連で検討した。「われわれが自分を対自的・反省的に捉えるとき、自分のすべてについてが意識の対象になるわけではなく、ある時点での社会的文脈の要請や動機状態などがトリガーになって、自己概念の全体から当該事態に即応した自己概念のサブセットが構成される」という working self-concept の観点は、換言すれば、われわれが状況に応じたさまざまな「わたし」をもつことを意味している。すなわち、当該事態に於いて喚起された自己概念の形態（configuration）は、状況や動機の様態に即応して異なる様相を呈すると考えられる。これが自己概念の状況間「非一貫性」である。これは、対人行動事態という刺激過重状態にあって、認知的選択性などのメカニズムにより、ある社会的文脈や動機に最も関連した、或いは適した自己関連情報が効率よくアクセスされるためであると考えられている。さすれば、自己概念の状況間「非一貫性」は、当該事態への適応という意味を持つと考えられる。このことはまた、当該事態において、場違いなことをしていないかなどを検索する、現実判断の機能という、自己の重要な自己調節的機能を現れとも考えられるが、実際の対人場面で自己概念が果たして状況即応的組織化をなすかについての検討は希であった。本研究では「指導教官」、「友人」、「集団状況」、「ひとり」という、実際の対人状況を導入し、面前の特定の他者との関係性の相違に即応して、自己概念の内容が条件間で異なることであろうことを検討した。更に、自己概念の状況即応的組織化は当該事態への適応と関連するのであるから、この現象は文化の相違にかかわらず見出されるであろうこと、しかし適応の具体的内実は文

化により異なるので、それを反映した現象型も同時に見出されるであろうと推察した。以上の仮説を、自由回答による自己記述が状況に即応した構成を成すか否かを、日米の被験者を比較することで吟味した。結果は予想に沿うものであった。すなわち、どちらの被験者についても例えば、「指導教官の面前」では「よき学生」としての自己を中心とした自己概念の構成が成されていたが、「よき学生」の内実については文化差が反映していた。すなわちアメリカでは目標や希望、あるいは能力ある学生等の肯定的な記述が多用されたのに対し、日本では、それらについて否定的表現をこの条件で最も多く使用していた。

自己のまとまりを保証する、時間的「一貫性」については、同一被験者の一年後のフォローアップ調査により検討した。実施時期と対人状況を統制し、同じ“Who are you?”テストを実施したところ、時間軸上での変動はほとんど見られなかった。

以上、社会的状況、文脈と時間軸の双方を導入することによって、自己概念の「一貫性・非一貫性」の議論が総合的に検討可能であろうと考察した。

(2)自己概念の構造に関する「非一貫性」については、ひとたび組織化した自己概念の下位側面間に「非一貫性」が存在することと精神的健康の機能的関連性を検討した。その際ひとつには、自己概念の諸側面間の程度やレベルの量的差異に関わる「非一貫性」を、今ひとつには諸側面の構成要素に質的相違が共存する場合の「非一貫性」の問題を検討の中心に据えた。諸側面間のレベルの量的差異とは、例えば、「理想の自己イメージ」と「現実の自己イメージ」の間に、理想ほどには現実が追いついていないというような場合のことである。後者の、諸側面の構成要素の質に関する「非一貫性」とは、自己イメージが例えば、男性性と女性性の両側面から構成されている場合のような、性質が異なる諸要素が混在した輻輳的な自己概念の組織化の様態のことである。

自己概念の諸側面間「非一貫性」についても、適応との関係を巡って、これまで対立する諸結果が見出されてきた。レベル間の量的差異については、一方で理想自己と現実自己の間にレベル的差異（ずれ）がないほうが精神的健康度が高いという類の、「一貫性」の効用を示す結果と、他方、このような「ずれ」が動機づけの積極的誘因として機能するという種類の、「非一貫性」に適応的意味を示す結果が見出されてきた。また、性質の相違に関する「非一貫性」についても、自己概念の複雑さという観点から、自己表象の多重的・輻輳的構成の、単一的・一様な構成に対する優越性や効果性が主唱されてはいるが、結果は必ずしも一貫してこれを支持するものではなかった。本研究では自己概念の構造内の「一貫性・非一貫性」の従来の論争に対し、評価的価値（evaluative valence）を導入することにより統合的解決を試みた。即ち、自己概念の下位側面間の関係性が全体として positive な場合は「非一貫性」は適応と正の関係にあり、対照的に negative な場合は、従来の指摘通り、負の関係性を示すであろうという仮説を検証することにより、自己概念の構造内の「一貫性・非一貫性」に関する従来の諸研究の体系的整理を試みた。

先ず、自己概念の諸側面のレベル間「非一貫性」について自己概念の諸側面間の関係性全体の評価的価値（evaluative valence）に沿って従来の諸結果を整理し、レベル間「非一貫性」と適応の負の関係を示した研究は関係性全体が negative であること、対照的にレベル間「非一貫性」の適応的意味を認める研究は、positive な関係性を扱っていた可能性があることを指摘した。この点を明確にすべく、本研究では、下位側面として、規範的自己、現実の自己、能力的自己の 3 つの諸側面を取り上げ、これら 3 つから成る関係性パターンが全体として positive な場合は適応と正の関係が、negative な場合は負の関係が見られるであろうという仮説を提唱した。また、男性性・女性性、道具性・表出性等のような、独立した関係にあると考えられている 2 つの要素のような、異なる性質に関する「非一貫性」については、自己概念の複雑さの観点から、2 つの要素が共存した輻輳的自己の捉え方（性質間「非一貫性」）の方が、どちらかで一つから捉えるという一様で単一な捉え方より効果性が高いであろうという仮説を提唱した。加えてこのことに関して実証的にはこれまで明確でなかった理由として、現実の自己、或いは能力自己などの要素的側面を単独に検討したためであろうと指摘し、この点についても、現実自己、規範的自己、能力的自己の 3 レベルの関係性パターン全体からの検討の必要性を指摘した。

自己概念関係性全体の positive、negative の valence を規定するのは、能力自己であろうこと、複雑な認知様式の効果性などの理由から、最も適応的なのは、能力自己の側面が高く、かつ他の側面とは量的に一貫性がないパターン（例えば MLH：規範意識はそこそこで、実際あまり行動の実践はしていないが、やればできる能力を持っている）であろうこと、またすべてにおいて高い HHH タイプは、自己の下位側面に関し、認知的分節化が低い、単純な認知

様式であろうこと、このような自己表象は完全主義者的傾向を示していることなどから、適応的には最良とは言えないであろうと推察した。またこのような自己の構造化の様態と適応の機能的関係にはやはり文化差を超越した共通性が認められるであろうと仮定した。結果は概ね、これらの傾向を指示する方向であった。しかし関係性の全パターンが抽出されたわけではないので、慎重さを伴いながらの解釈に留めた。

性質間「非一貫性」については、gender identity について、道具性・表出性という 2 つの側面を取り上げ、性質間「非一貫性」の適応における効果性を検討した。その際、レベルの側面も導入し、第一研究と同様、規範的自己、現実自己、能力自己の 3 レベルを各性質に導入した。性質間「一貫性」とは、道具性、表出性のどちらか一様の側面から自己概念が構成されているタイプで、性質間「非一貫性」とは異なる性質のどちらも持っている、2 つを共存させた捉え方である。後者のような複雑な自己の捉え方は、配偶者、親、職業人などの異なる役割の要請に対し、それに応じて道具性・表出性のどちらかを適宜発揮したり、或いは両者が必要な場合にも対応できる認知的準備ができるということから、一様な自己概念の構成より適応的であろうとの仮説を提唱した。また、レベル間「非一貫性」の観点から、さりとて 3 つのレベルにおいてすべてが高いタイプは、レベル間にずれがあるタイプほど健康的ではないであろうとの仮説も提起した。結果は仮説を支持するものもあったが、ここでもすべての自己概念関係性パターンが検討できたわけではなく、特に、道具性のみが顕著なパターンと道具性・表出性の双方から成る自己概念関係性パターンについては、予想通り後者が精神的健康度や生活満足度が高いものの、それほど明確な差とは言い難いという結果となった。

自己概念の「非一貫性」は、「一貫すべし」という西欧的文化的自己観の下で、あまり関心が払われてこなかったが、以上に述べてきたことから、状況間であれ、構造内であれ、自己概念の「非一貫性」は適応的意味を持つことが示唆された。今後はこのような「非一貫性」の効果性を、「単純ではない、ややこしい」事象に対する耐性という観点から検討する必要があろう。自己概念の「非一貫性」は広義には複雑な認知構造であろうと考えられるからである。このような認知様式と感情制御の機能的関連を検討することは、昨今の短絡的な青少年の行動の解明に有益かもしれない。

論文審査の結果の要旨

本研究は、自己に関連する諸問題のうち、特に自己概念の一貫性－非一貫性に焦点を当てて、適応・精神的健康との関連を検討したものである。

論文は、4 つの実証的研究とそれに関連する理論的考察から成り、それぞれ異なった意味での一貫性－非一貫性の効果を検討している。

まず研究 1 は、日米の被験者を用いて、自己概念全体の中でどの部分が活性化し自己記述に用いられるか（working self-concept）が、状況間で異なることを示し、状況間非一貫性の傾向を明らかにした。続いて研究 2 では、1 年の時間間隔をおいて 2 回測定された各人の自己概念が、比較的変化しないという、時間的一貫性・安定性の傾向が示された。第 3 研究では、規範的自己、現実自己、能力的自己というレベルの異なった 3 種の自己概念間の食い違い・非一貫性が、精神的健康にどのような影響を及ぼすかを検討している。さらに第 4 研究では、道具性と表出性という対照的な心理的機能を併せ持つこと、すなわち多面的な心的特性を同時に備えるという意味での非一貫性・心的複雑性の適応的な意味を吟味している。

このように本論文は、すぐれた着想に基づいて、自己概念の非一貫性の効果を多面的に考究した労作であり、博士（人間科学）の学位の授与に十分値するものであると判定された。